

小児救急医療体制の在り方に関する研究

(分担研究：香川県の平日夜間救急の現状と問題点)

今井 正、大西 鐘壽

香川県の小児の平日夜間救急の医療体制の現状と問題点を明らかにするために、香川県内の小児科の診療を行っているすべての施設と自治体へのアンケート調査を行った。夜間診療所が設置されていない地域では、一部の中核病院に負担が集中しており、特に深夜帯ではその傾向が強い。夜間診療所が設置されていない地域では、小児科医が連日時間外診療が行われていることより現在は問題が表面化していないのが実状である。

時間外診療、夜間診療、夜間救急医療

はじめに

香川県の救急医療、特に小児救急を始め一次救急医療体制の整備が遅れており、平成6年7月より、一次救急施設として高松市夜間診療所を開設するとともに二次病院の指名輪番制を敷くことにより、夜間診療の体制を整えてきた。しかし、高松市以外の地域では、夜間診療の体制は整備されておらず、問題点も多いと思われる。このため、高松市夜間診療所の現状の実態調査を行い、さらに平日時間外診療の実態を調査するために、香川県内の小児科の診療を行っているすべての施設と自治体へのアンケート調査を行った。

対象と方法

1. 高松市夜間診療所の受診者数、受診者の年齢、二次病院への転送者数、住所などについて調査を行った。
2. 香川県内の自治体に小児の平日時間外診療の実態等についてアンケート調査を実施した。アンケートの回収率は83.7%であった。
3. 香川県内の小児科の診療を行っている施設（香川県小児科医会および香川県小児科学会の会員）に夜間診療の実施の有無、診療可能時間、全受診患者の受診時間、年齢、病名、重症度などについてアンケートを行った。本研究の開始時期の関係で調査の実施時期はたまたま一年を通じて患

者数の最も少ない11月となった。アンケートの回収率は病院は27施設中25施設(92.6%)、
医院は60施設中47施設(78.3%)であった。

結果と考察

1. 高松市の人口は約33万人で15歳未満の小児の人口は約53,000人で0-2歳児約1万人、3-4歳児約6,600人、5-9歳児約17,000人、10-14歳児約2万人である。診療所が開設された平成6年度は1日当りの受診者は13.1人、平成7年度は19.6人、平成8年度(12月末まで)は20.7人と年々増加している。受診者の内訳は1歳未満20.6%、1-2歳19.7%、2-3歳14.8%、4-6歳25.8%、7-15歳19.2%であり、年齢別でみると1歳未満の受診者が多く、各年齢にわたって受診されていた。患者住所では、高松市内87.1%、市外が12.9%であり、2次病院への転送率は3.3%であった。

2. 県内に夜間診療所を設置している市町村は1市1町のみで、小児科の専門医が交代で診療を行っているのは高松市のみであった。1町は離島で島内の診療所が交代で夜間診療を行っており、重症者は島後の後方病院に患者の搬送を行っている。

約30%の自治体では問い合わせがあれば主に119番で対応して、近隣の総合病院や小児病院の受診を紹介しているくらいであり、多くの市町村では夜間診療に関してほとんど何もしていないのが現状である。しかし、患者が近隣の総合病院や小児病院を受診していることにより、特に問題が発生していないため、行政サイドの現状に対する評価は、特に問題がないと評価している自治体

が63%と多かった。

また、今後夜間診療所の設置を予定していない自治体が大部分であり、その原因は、採算がとれず財政を圧迫することや勤務する医師の確保が困難であることが問題点としてあげられていた。

3. 約90%の病院は時間外診療を行っており、毎日小児科医がオンコール体制を行っている施設は約半数である。92%の病院でなんかの形で依頼があれば、診療を行っている。また、深夜帯でもいつでも診察の依頼に応じている病院は64%もある。医院の72%が平日時間外診療を行っており、深夜帯でも62%の医院で診療を行っている。多くのかかり付け医の医院や病院の勤務医が深夜帯でも診療に応じているため夜間診療所が設置されていない自治体でも、現在特に大きな問題が生じていないと考えられる。

しかし大半の病院小児科の規模は小さく、常勤医が3人以上いる施設は25施設中8施設(5人以上の施設は4施設)のみで、小人数の小児科医で連日時間外診療が行われているのが実状である。このため、自由記載では、夜間診療に協力したいが、1人では困難という意見や現在の夜間小児救急はどの施設も小児科医のボランティア精神で成り立っている等の記載がみられた。そして、病院の72%、医院の61%(夜間診療所が設置されていない高松市以外は70%)が現在の夜間診療体制に問題があると考えている。夜間診療体制をどのようにするべきか?との質問に対し夜間診療所の設置および充実46.1%、夜間当番病(医)院制度19.3%、現状で問題なしは35%であった。夜間診療所の数は、県内に2-3ヶ所に必要と考えている施設が53%、4-7ヶ所必要と考えている施設が28%であった。また、11月

中の平日夜間に受診した患者数は、1245人で香川県内在住の患者は1234人であり（県外より受診した患者21人）、この1234人について検討した。受診患者の年齢は、0-2歳児650人（53%）、3-4歳児225人（18%）、5-10歳児251人（20%）、10-14歳児108人（9%）であった。香川県内の人口1000人あたりの受診率は小児全体で7.68人であった。年齢別にみると0-2歳児は23.57人、3-4歳児は11.79人、5-10歳児は4.79人、11-14歳児は1.76人であった。11月は流行性の疾患がなく、高松市の夜間診療所の受診者を参考にすると他の月と比較するとかなり少ないと思われた。

患者の受診時間は、17-22時が912人（73%）、22-24時215人（17%）、0-4時78人（6%）、4時-7時まで40人（3%）であった。17-22時で約75%、17-24時では90%を占めているため、夜間診療所が24時まで診療されていれば、90%の患者を扱う事ができる。受診に要する時間は、15分以内399人（32%）、15-30分567人（46%）、30-45分251人（20%）、45分-60分23人（2%）であった。約25%の患者が通院に30分以上もかかっている。これは診察に応じる診療所が近くにないためと思われる。

受診患者の重症度分類は特に基準を設けなかったため、主治医の判断で行ったが、重症182人（15%）、中等症386人（31%）、軽症675人（54%）であった。入院が必要であった患者は128人であり、時間外受診者の約9.3%であり、意外に多く、夜間診療の重要性が認

識される。受診者の病名は、上気道炎など425人（34%）、腸炎などの消化器疾患299人（24%）、気管支喘息などの呼吸困難をきたす疾患173人（14%）、事故など113人（9%）が多かった。腸重積症や急性虫垂炎などの外科的疾患、けいれんや髄膜炎など急を要する疾患は51人（4%）であった。また、救急車で搬送された患者は18人であった。受診施設別で見ると、高松市の夜間診療所は290人（23%）、K病院207人（17%）、M病院60人（5%）、N病院とI病院は4%その他の病院24%、医院23%であり、夜間診療所、上位4病院、その他の病院、医院と約1/4ずつの受診であった。なお、K病院、M病院は高松市より遠方にある地域の小児医療の中核病院であり、夜間診療所の設置されていない地域では、一部の病院に負担が集中しているのが現状である。また、高松市の夜間診療所が閉鎖される時間帯である0-7時までの受診施設ではK病院26%、H病院14%と2つの病院が全体の1/3を担っており、深夜帯において一部の病院の負担がさらに強くなっている。

他地域の今回の受診状況と比較すると、14歳以下の小児人口1000人あたりの1カ月間の受診率は香川県は7.68であり、大阪の北摂地域11.5、泉州地域11.1、和歌山市11.1（平成8年のデータ）と比較すると少なかった。重症度の分類は異なるが、受診率の低い香川県は中等症以上は46%であり、泉州地域の32.9%より多かった。これは、香川県は夜間診療所の設置が一部の地域のみであるため、軽症の患者が受診を控えていることによると思われる。

結論

香川県の小児の夜間診療の現状は、夜間診療所

の設置されていない地域では、一部の中核病院に負担が集中しており、特に深夜帯ではその傾向が強い。通院に要する時間が30分以上必要とする患者が約25%であり、入院が必要な患者は受診者の9.3%であった。現在は、夜間診療体制が制度化されているのは県内のごく一部であり、そ

他の地区は小人数の小児科医で連日時間外診療が行われていることにより現在はあまり問題が表面化していないのが実状である。このため、夜間診療所の増設（県内に4-7ヶ所）および深夜帯の診療体制の確立が急務と思われる。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



香川県の小児の平日夜間救急の医療体制の現状と問題点を明らかにするために、香川県内の小児科の診療を行っているすべての施設と自治体へのアンケート調査を行った。夜間診療所が設置されていない地域では、一部の中核病院に負担が集中しており、特に深夜帯ではその傾向が強い。夜間診療所が設置されていない地域では、小児科医が連日時間外診療が行われていることより現在は問題が表面化していないのが実状である。